

明治時代前半の東京大学工学部蔵書の蔵書印と蔵書票

機械系三学科図書室 滝沢正順

1.

蔵書印や蔵書票は書籍の所蔵者を表示するために押捺・貼付されるが、現在の東京大学工学部・工学系研究科の明治時代前半の2つの前身校(工部大学校と東京大学三学部)の蔵書印・蔵書票について若干記してみたい。

現在の東京大学工学部・工学系研究科の明治時代の蔵書について、受入台帳等は現存しないようである。したがって書籍に実際に押捺・貼付された蔵書印・蔵書票等は、その書籍の購入等の時期を知る有力な手段である。図書館業務の上でも、蔵書印等によって利用者の希望にこたえることが可能になる場合がある。

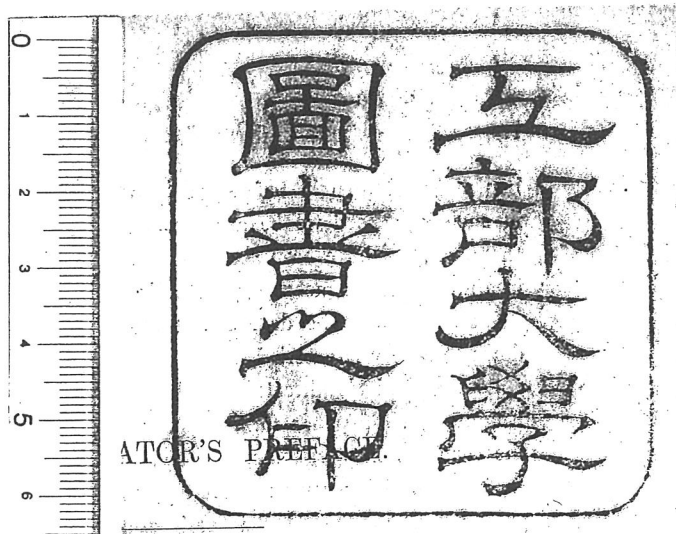
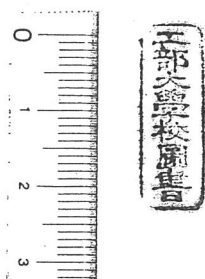
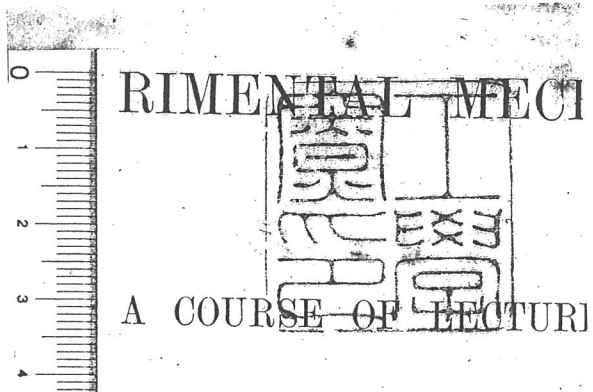
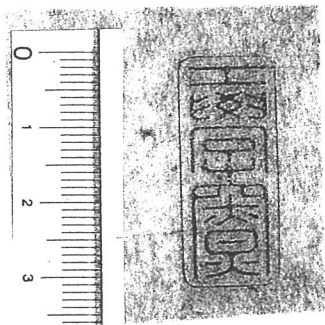
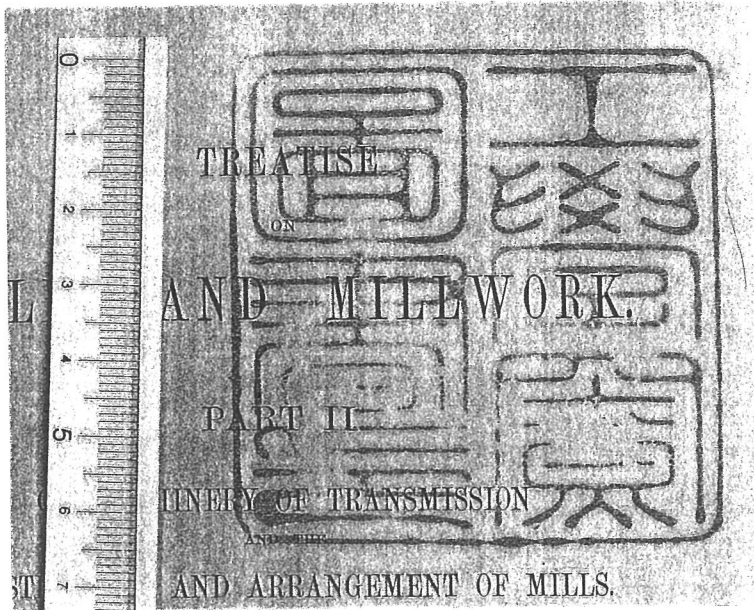
一例をあげると、以前、明治から昭和前期にかけての著名な英語学者の伝記を映像作品(ノンフィクション)にするにさいし、在学していた工部大学校の蔵書を作品中に入れたいとの希望が制作会社から寄せられたことがあった。許可をえて制作会社に旧蔵書数冊を貸し出し、作品中にもそれらの旧蔵書が出てきていた。

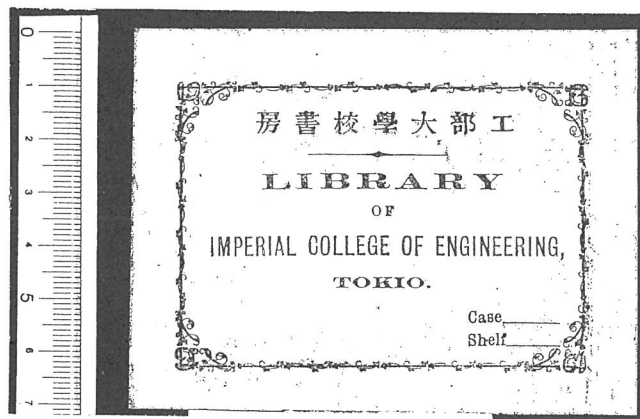
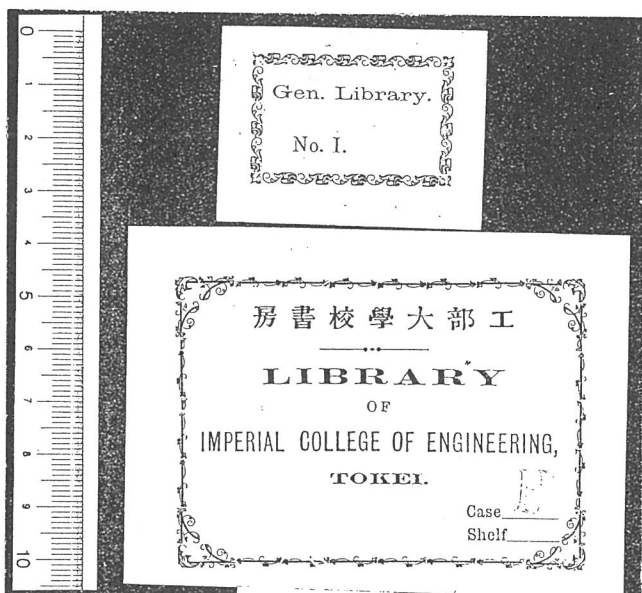
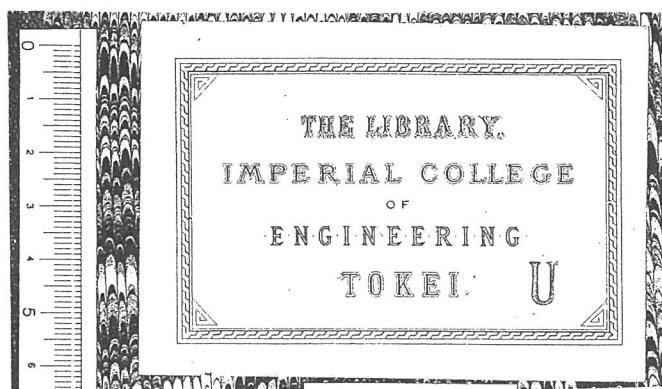
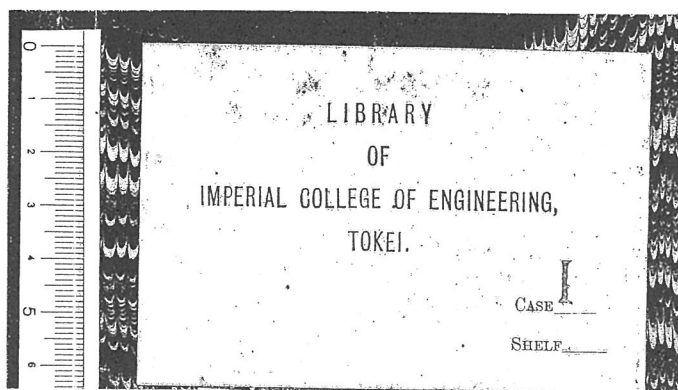
その際に、工部大学校の旧蔵書かどうかは、蔵書印で判断をした。映像作品中でも本のタイトルページを開き、「工部大学図書之印」という蔵書印が読みとれるよう演出されていた。

2.

工部大学校とその前身の工学寮について、蔵書印と蔵書票の種類はすべて把握できているとは限らない。筆者は以前に、把握している種類をまとめたが^{註(1)}、それで全部ではないかもしれない。

『改訂増補・内閣文庫蔵書印譜』(国立公文書館、1981年)、樋田直人『蔵書票の魅力』(丸善、1992年)に紹介されたもと一部重なるが、ここにその一部を示す(把握している全部ではない)。なお、『蔵書票の魅力』は丸善発行の雑誌『学燈』での連載がまとめられたものである。

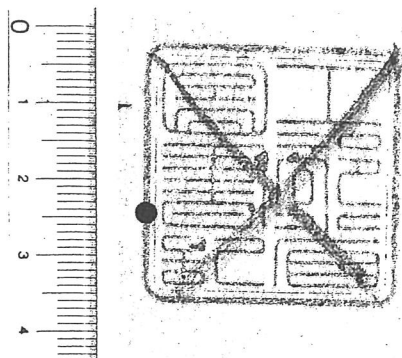




3.

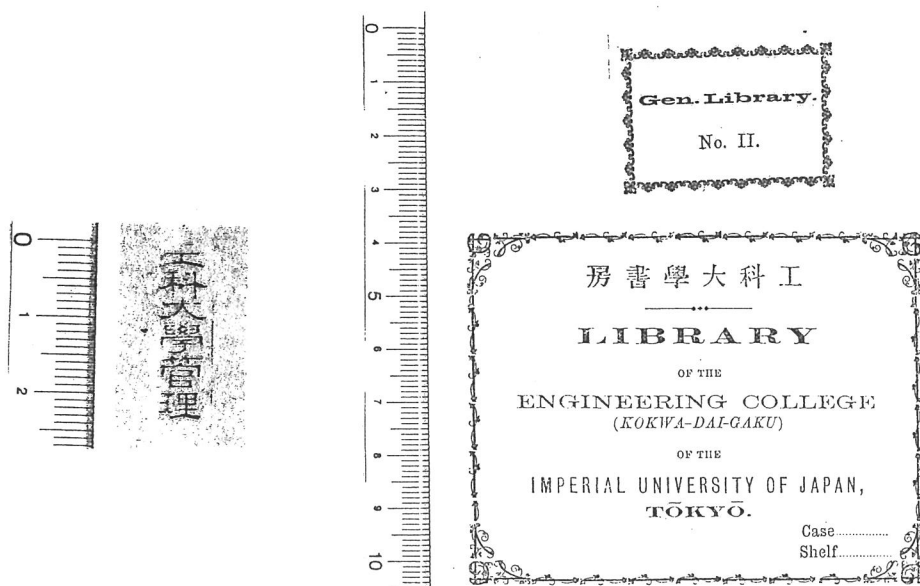
次の「工部省図書印」は、工学寮・工部大学校旧蔵書のなかに押されているものがあつた。受入台帳等が現存しないと思われる現在、工部省からの移管本であることは本に押された蔵書印等によってしか知ることができない。

印にあるバツは移管時に抹消のために付けられたもののようで、鉛筆で「From Kobusho」というメモも本に記されている。



4.

明治 19 年に帝国大学が発足した当初の、工科大学書房の蔵書印・蔵書票については、印影等を紹介したものを知らないなので、ここに示してみる。「帝国大学図書之印」も押されているが、これは省略する。



5.

明治 19 年以前の東京大学三学部の系統の書籍も蔵書印等が押されているが、それを見ると、現在の東京大学工学部・工学系研究科に残されているのは、明治以降に新しく購入等した本ばかりのようである。^{注(2)}

東京大学三学部の系統上の前身である旧徳川幕府の機関からの引き継ぎ書と思われる書籍は見たことがない。

注(1) 滝沢正順「工部大学校の書房と蔵書」、東京大学編・発行『学問のアルケオロジー』、東京大学出版会発売、1997年

滝沢正順「工部大学校書房の研究」1～3、『図書館界』第40巻1,3,4号、1988年。

注(2) 見たのはおもに次の文献に記した範囲である。

滝沢正順「明治時代の蔵書のことなど」、『図書館の窓』（東京大学附属図書館月報）第29巻10号、1990年10月、101-102頁。